

隔離床によるいちご無仮植育苗法の改善と隔離床用培土の種類と量							
<p>〔要約〕 いちごの無仮植育苗法を、無病で雑草種子が混入していない軽量の培土を用いた隔離床とする省力的な育苗法に改善した。親株床に1/10の傾斜をつけ、幅約1mの枠を組み、枠の中に培土を入れて隔離床とする。培土は、パーミキュライトが苗の生育及び採苗時の作業性に優れ、培土量は厚さ4cm以上必要である。</p>							
園芸研究所・野菜花き部・野菜品種研究室					連絡先	092-922-4111	
部会名	園 芸	専門	栽 培	対象	果菜類	分類	普及

〔背景・ねらい〕

いちごの促成栽培はポット育苗を行うため、培土の準備、運搬など厳しい労働を生産者に強いている。また最近では良質な培土も不足している。

このような状況に対応するための省力的な育苗法として無仮植育苗法があるが、現行の方法は雑草の防除が煩雑で多労を要する等の問題がある。

そこで、取り扱いが簡単で容易に良質な苗養成ができる隔離床を利用した無仮植育苗法に改善するとともに、それに用いる培土の種類と必要量を明らかにする。

〔成果の内容・特徴〕

①親株床に1/10の傾斜をつけて、培土の流亡と雑草の混入を防ぐために、幅約1mの板枠を組み、使用済みのビニルを地面に敷いて、その上に培土を入れることにより、簡易な隔離床を作成することができる(図1)。

②隔離床用の培土としては、子苗の生育が良好であるとともに、根土が振るいやしくて採苗時の作業性に優れるパーミキュライトが最も適している(表1)。また、パーミキュライトは軽量で運搬及び育苗床の準備が簡単であり、再利用も可能である。

③隔離床の培土量は、水管理が容易で良質の苗を養成するためには、厚さ4cmは必要である。培土量が少ないと、降雨により培土が流亡したり、晴天時の水管理が煩雑となり、良質な苗が確保できない(表1, 2)。

〔成果の活用面・留意点〕

①いちごの省力育苗法として活用できる。

②晴天日には培土が乾燥し易いため、かん水の自動化を図るとともに、子苗の生育に応じて液肥を施用する。

③使用済みの培土を翌年、再利用する場合は、使用する前に必ず消毒して、混入雑草の種子を死滅させておく。

[具体的データ]

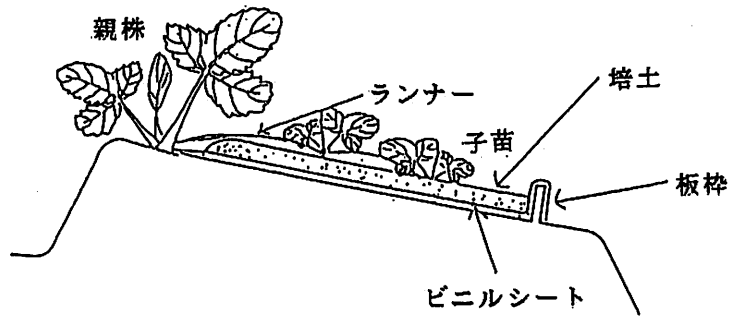


図1 隔離床による無仮植の育苗方法

表1 隔離床用培土の種類及び量と子苗の根張り並びに採苗時の作業性(平成4年)

培土の種類	培土量 (厚さ)	子苗の 根張り	採苗時の 作業性	有効子苗	
				本数	割合
	cm			本	%
真砂土	2	-	-	29	34
"	4	△	×	21	13
"	6	-	-	50	25
与作	4	○	△	87	34
ハートミックス	4	○	△	56	21
ハートミキュライト	4	○	○	50	26

注) ①子苗の根張り、採苗時の作業性:○(良)~△~×(不良).
②有効子苗:親株5株当たりの本葉5枚以上の苗で、割合は総子苗数(本葉2枚以上の子苗数)に対する数値。

表2 隔離床用培土の種類及び量と開花(平成4年)

培土の種類	培土量 (厚さ)	頂花房		
		平均開花日		開花揃い株率 %
		月	日	
	cm			
真砂土	2	12	2	70.7
"	4	11	24	69.3
"	6	11	20	78.4
与作	4	11	20	95.5
ハートミックス	2	11	22	62.5
"	4	11	21	100
"	6	11	21	95.6
ハートミキュライト	4	11	24	100

注) 開花揃い株率:最初の株の開花後、3週間以内に開花した株の割合。

[その他]

研究課題名: 隔離床利用による省力育苗技術の確立

予算区分: 経常

研究期間: 平成4年度(平成3~4年)

研究担当者: 柴戸靖志、伏原 肇、林 三徳

発表論文名: 平成3~4年度園芸研究所野菜花き部野菜品種研究室試験成績書